

シニアスポーツ活動に関する調査研究 —シニアバスケットボール活動の現状について—

児玉 善廣¹⁾ 益川 満治²⁾ 山田 恵子¹⁾ 小池 和幸¹⁾

1) 仙台大学体育学部 2) 弘前大学

学会等報告

シニアスポーツ活動に関する調査研究 —シニアバスケットボール活動の現状について—

児玉 善廣¹⁾ 益川 満治²⁾ 山田 恵子¹⁾ 小池 和幸¹⁾

1) 仙台大学体育学部 2) 弘前大学

Yoshihiro Kodama¹⁾, Mitsuharu Masukawa²⁾, Keiko Yamada¹⁾, Kazuyuki Koike¹⁾: Research on senior sports activities -Current status of senior basketball activities- : Bulletin of Sendai University, 52 (1) : 73-83, September, 2020.

1) Sendai University Faculty of Sports Science 2) Hirosaki University

KEYWORD senior basketball, senior sports, active aging

キーワード シニアバスケットボール, シニアスポーツ, アクティブエイジング

I はじめに

世界でも類を見ない超高齢化社会を迎えた日本において^{24), 29), 36)}, スポーツの文化的価値は如何なるものなのかを思案する事は重要である。近年, 我が国におけるスポーツ政策の推進により, 以前にも増して中高齢者(以下、本研究ではシニア^{注1)}と呼ぶ)がスポーツに興じる様子が広く一般に認識されるようになり, ジェロントロジー^{7), 27)}を一環とする科学的アプローチ^{12), 17), 21), 22), 24), 25), 33)}も少なくない。

谷藤²³⁾は, 中高年のスポーツが盛んになりつつある我が国において, 海外との歴史的な差が大きい中でその現状と課題をいくつか挙げている。活動では特に「生き甲斐」を感じている一方で, 年齢区分や規則等の問題があるとし

「ワールドマスターズスポーツ」¹⁶⁾に倣うべく「競技スポーツ」と「レクリエーションスポーツ」の融合した新たな領域の必要性を指摘している。例えば, アメリカでは, すでに1997年頃に, 次のようなことが指摘されていた¹⁾。「人々の身体的な旺盛維持年数が目に見えて長くなりつつある。これに合わせて高齢者(シニア)は多様なスポーツ活動にますます参加するようになってきた。そして, ここ10年間ほどの間にマスターズスポーツ大会¹⁶⁾や, シニア・オリンピックスといったシニアを対象とした公式スポーツ競技大会が開催されるようになった。」つまり, アメリカでは1980年代からシニアの加齢に伴う体力の減退傾向が緩やかになり, その分スポーツ活動志向が高まったと考えられる。

確かに我が国でも各競技団体では, 若年層の

注1) 「シニア」は一般的に, 年長者・先輩・上官などといった意味で使われている。従来から「年寄り」というネガティブなイメージで普及していない経緯があったが, 最近の医科学研究の発達や国民のスポーツ活動意識の高まりによって, 各地域や分野で取り扱われている。

cf. 最初に「シニア」と言う言葉をスポーツに使われたのは, IBMの創設者トーマス・J・ワトソンと言われ, 現在もPGAシニアツアーとし50歳以上のプロゴルファーの大会が開かれている。

選手育成等の競技力向上と並行して地域スポーツの普及と拡大を目的とした具体的方策が検討されている。しかしながら、その一方でシニアスポーツを取り巻く現場では、競技運営に伴う規制、施設環境、インフラの不整備など、その課題は山積みしている事は否めない。また、シニア世代の競技者の活動に於いては、活動自体不明瞭な点が多く活動そのものや、運営自体に満足のいつている状況とは言いがたいようである^{8), 21), 23), 24), 27), 33), 36)}。

日本バスケットボール協会(JBA)¹⁴⁾は、2015年にガバナンス改革委員会のもと、JPBL将来構想整備委員会を設置、「社会人カテゴリー活性化推進会議」を経て社会人カテゴリーの再編、社会人連盟^{14), 31)}を発足し現在に至っている。現在、当協会への競技登録者数だけを見ても63万人¹⁶⁾を超えており、国内競技団体のトップレベルを占めている。その中でもシニア(競技経験者・愛好家)は、今なお増加の一途を辿っている。しかし、「シニア」あるいは「マスターズ」などの名称や定義も含め、我が国全体の活動実態も不明な点も見られ、競技者を取り囲んでいる環境全体が整っているとは言いがたいのが現状である。従って、このような現状を具体的に分析して検討することは、シニアスポーツ活動の実態の一端を知る手がかりとなり、当然他競技への波及も期待できることから、ひいては、我が国のスポーツ文化の成熟に資すると考えるため社会的意義は大きいと言える。これからの超高齢化社会が抱えつつある種々の課題を少しでも緩和して行く事を見据えながら、将来のアクティブエイジングの可能性を追求するために継続的な研究努力が必要と考える。

そこで本研究は、競技者として第一線を退いてもなお、バスケットボールに親しみ、第二のバスケットボール人生を謳歌するシニア愛好家を対象に、活動の実態調査を実施し、得られた回答から今後のシニアスポーツの在り方や方向性を探るための一資料を提示することを目的とした。

Ⅱ 研究方法

1. 対象

本研究の対象は、日本バスケットボール協会の組織・規約¹⁴⁾を参考にすると共に、現在全国規模で活動している40歳未満(現役を退いた社会人)と40歳代から80歳代までの選手、更には第2回全国社会人オーバー40・50バスケットボール選手権大会に参加した62チームの選手289名である。チームの内訳は下記のとおりである。

- 1) 東北ブロック対象チーム：青森県(2)、秋田県(3)、岩手県(2)山形県(1)、宮城県(3)、福島県(2)：計13チーム
- 2) 横浜カップ“全国ゴールデンシニアバスケットボール交歓大会”参加チーム：北海道(1)、東北(1)、関東(4)、甲信越(1)、東海(2)、近畿(2)、中国・四国(1)九州・沖縄(2)、前回優勝チーム(1)、開催地代表チーム(1)：計16チーム
- 3) 全国ゴールデンシニア交歓会(埼玉県)参加チーム：北海道(旭川・帯広：1)、岩手県(1)、埼玉県(1)、神奈川県(1)新潟県(1)、愛知県(1)、スーパーシニア選抜チーム(1)全国選抜チーム(1)：計8チーム
- 4) 第2回全国社会人オーバー40・50バスケットボール選手権大会の参加チーム
計64チーム^{注2)}

以上、アンケート調査は1)から3)のバスケットボールチームメンバー合計289名、内有効回答234名を調査対象とした。聞き取り調査については、上記大会1)から4)の参加メンバーの主なチーム責任者、及び一部の選手(28名)を対象にした。

2. 調査方法

1) アンケート調査

アンケート調査は無記名形式で実施、内容については競技履歴、属性および活動状況(動機、目的、意義)について計15項目で調査した。(表-1)

注2) 大会要項：各ブロック別に対し、登録チーム数の割合に準じ参加チームが決定されている。

シニアスポーツ活動に関する調査研究

表－１ アンケート用紙

アンケート内容一覧

1. ご自身の経歴についてお答え下さい。

(1) ご自身の年齢と性別 _____ 歳 男子・女子
過去の公式の競技歴 _____ 年

(2) 公式（協会選手登録）の競技活動の時期（期間）はどのくらいですか
① 小・中・高・大 _____ 年生 ～ 小・中・高・大 _____ 年生
② 公式の社会人・実業団・プロなど大会 _____ 歳 ～ _____ 歳
③ 時期： _____ 大会名： _____ 大会 最高成績： _____ 位

2. 現在の活動現場・状況についてお答え下さい。

(1) 活動を始めた動機について選択してください。
① 自主的 ② 家族環境 ③ 友人・仲間の誘い ④ 職場・同僚の誘い
⑤ 地域・社会的環境（公共事業団体の依頼 他）
⑥ その他 _____

(2) シニア活動の目的をお答えください。（複数回答可）
① 趣味・特技 ② 仲間作り ③ 技術の維持向上 ④ 勝利（競技力の向上）
⑤ 健康・体力の維持向上 ⑥ 社会貢献（ボランティア・普及活動 他）
⑦ その他 _____

(3) シニア活動におけるチームの規模をお答え下さい。
① 5～10人以内 ② 10人～15人 ③ 15人～20人
④ 20人以上 ⑤ その他 _____

(4) 現在のサークル活動範囲・母体・グループの種別・規模をお答え下さい。
① 地域・単体 ② 県内 ③ ブロック ④ 東/西日本 ⑤ 全国
⑥ 特定のグループ（ex.同窓・職場） ⑦ 各サークル（施設利用の繋がり他）
⑧ 特定団体の加盟 ⑨ スポンサーによる企画運営（複数回答可）
⑩ その他 _____

(5) a 現在の活動については、満足しておりますか。
① 満足 ② どちらともいえない ③ 満足していない

(5) b 満足していない場合のみお答え下さい。どんな点についてですか。
① 競技レベル ② 練習会場 ③ 練習時間 ④ 組織力（スタッフ 他）
⑤ 人間関係 ⑥ 活動資金 ⑦ 競技団体（協会など） ⑧ 支援体制
⑨ 情報量（複数選択可）
⑩ その他 _____

(6) 現在の活動に対し地域・関係団体は協力的ですか。（理解度）
① 理解されている ② どちらともいえない ③ 理解されていない
④ 自由な形で活動しているため、特に協力関係がない

(7) a 普段の活動で大事にしているものを、下記から選択して下さい。
① シュート技術 ② シュート以外の技術 ③ チームオフENSE（セットオフENSE他） ④ ディフェンス技術 ⑤ リバウンド・ルーズボール ⑥ 体力 ⑦ 戦術 ⑧ 柔軟性・怪我 ⑨ 特に考えていない
⑩ その他 _____（複数回答可）

(7) b 普段の活動で大事にしているものを下記から選択して下さい。
① 闘争心 ② 集中力 ③ 忍耐力 ④ 判断力 ⑤ リーダーシップ
⑥ チームワーク ⑦ フェアー・プレー ⑧ コミュニケーション
⑨ 親睦・交友 ⑩ 健康 ⑪ 研究 ⑫ 特に考えていない
⑬ その他 _____（複数回答可）

(8) あなたにとっての現在の活動（シニアバスケットボール）の意義についてお答え下さい。（価値観・趣旨・こだわり等、自由記述で結構です）

(9) 現在のサークル活動以外にスポーツ活動（大会参加含）をしておりますか。
① 競技活動をしている（種目名 _____ 競技）
② していない
③ その他（趣味（自己流）・計画的な活動・指導・教室、他）

(10) 我が国がこれから世界トップの高齢者社会国となっていく訳ですが、現在の活動自体のようになって行くのか？また、どのようになって行くべきでしょうか？シニアスポーツ（バスケットボール競技）活動の今後（方向性・将来性など）についてお答え下さい。（自由記述）

参考：シニアスポーツ活動（バスケットボール競技、他）の影響「役割・貢献度は考えられないのか？」という観点等からもお答え頂ければ幸いです。
① 特に考えたことがない
② あえて考えてみると

2) 集計・分析の手順

それぞれのアンケート項目に40歳未満、40歳代、50歳代、60歳代、70歳代、80歳代ごとに集計した、自由記述の設問についてはKJ法に基づき、競技者の活動に関する現状と意識傾向を分類した。

3) 聞き取り調査

聞き取り調査は1) 東北ブロック対象13チーム、2) 横浜カップ参加16チーム、全国ゴールデンシニア交歓会参加8チーム、4) 第2回全国社会人オーバー40・50バスケットボール選手権参加62チームから主なチーム責任者、一部の選手へ「活動の状況と課題に」について聞き取りを行った。

3. 調査期間

- 1) アンケート調査：令和1年7月10日～11月
- 2) 聞き取り調査：令和1年7月中旬～11月

Ⅲ 結 果

1. 各設問についての比較検討.

対象者の内訳は40歳未満（65）、40歳代（48）、50歳代（32）、60歳代（73）、70歳代（13）、80歳代（3）で、以上15項目の質問から特徴の見られた結果を挙げる。

1) 「活動を始めた動機」(単回答)

特に多かった理由は②「友人・仲間の誘い」で参加しているケースで、234の全回答数から142の回答があった（以降（142/234）と表記）。次いで、①「自主的」で参加しているケースでも89と、この2つの理由に集中していた。年代別で見ると40歳未満から60歳代にかけて78%～66%と高い値を示しており、特に若い層が友人や仲間からの誘いで参加している傾向を示していた。また、50歳代以上の各世代では、ややばらつきはあるものの特に高齢者層（60歳以上）が自主的に参加している

傾向が見られた。(図-1)

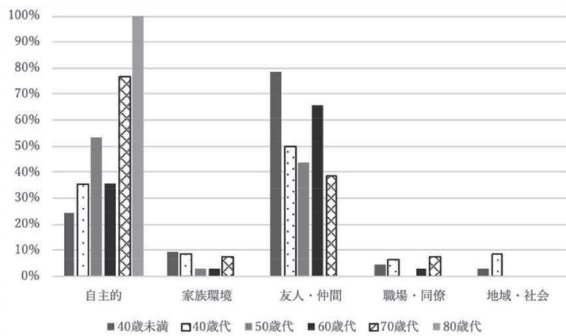


図-1 活動を始めた動機

2) 「活動の目的」(複数回答)

特に多かったのは⑤「健康・体力維持・向上」(174/560)であった。次いで、①「趣味・特技」(168/560)と、②「仲間作り」(123/560)の回答が多かった。更に、年代別で見ると、⑤「健康・体力維持・向上」は、40歳以下と80歳代がやや少ないが、各年代で多い割合(84%~72%)を示しており、参加者の多くが自己の健康と体力に対する関心度や意識が高い事が伺えた。この結果は、長ヶ原²⁷⁾の報告でも同じ指摘をしている。また、①「趣味・特技」では、80歳代の他は(77%~62%)の幅で殆どの年代で多い割合を示した。②「仲間作り」では、80歳代から50歳代にかけて多い割合(67%~53%)を示しており、若い年齢層では趣味や特技に対する意識が強い傾向があるが、高齢になるに従って健康や仲間と交流を目的とする傾向が伺えた。(図-2)

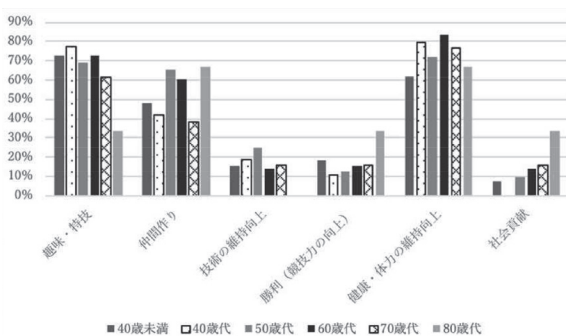


図-2 活動の目的

3) 「現在の活動に対して満足しているか」(単回答)

ここでは、①「満足している」(189/234)が多く、殆どの年代が満足と感じており、その意識は年齢が高くなるに従って多くなる事が伺えた。

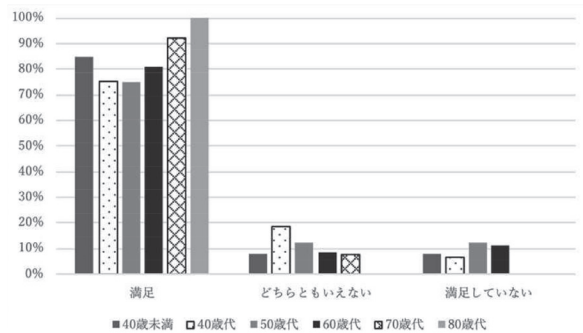


図-3 活動に対する満足

4) 「地域・関係団体の協力(理解)」(単回答)

ここでは、①「理解されている」(116/234)が半分を占めた。次いで④「自由な形で活動しているため協力関係がない」(54/234)、②「どちらとも言えない」(52/234)だった。年代別で見ると、40歳代から70歳代にかけ多い割合(60%~51%)を示しており、参加者の半数は地域や関係団体が協力的である事や理解されて活動していると感じている事が伺えた。(図-4)

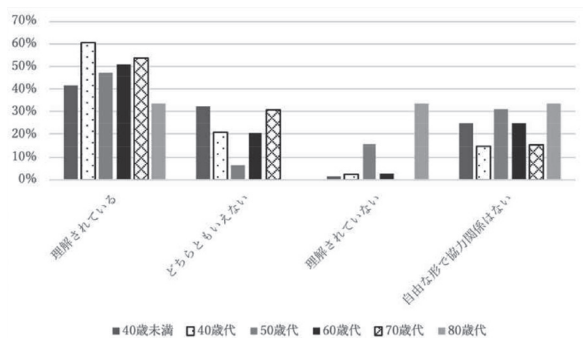
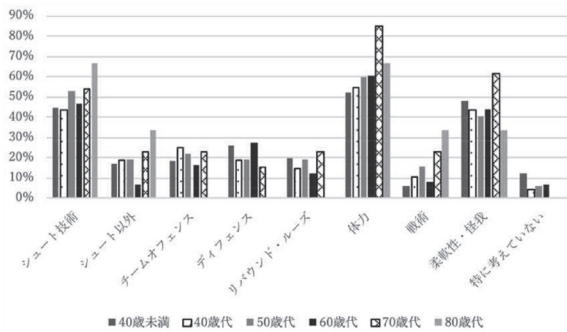


図-4 地域・関係団体の協力(理解)

5) 「活動で大事にしているもの(技能・体力)」(複数回答)

特に多かったのは⑥「体力」(136/566)であり、次いで①「シュート技術」(110/566)、⑧「柔軟性・怪我」(106/566)だった。更

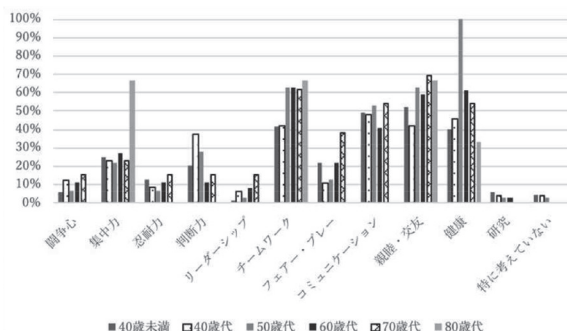
に、年代別で見ると、高齢になるに従って体力を意識して活動をしている事が伺え、更に、シュート技術についても拘りを持って臨んでいる事が伺えた。また、怪我などに注意を払うヘルスケアの意識も特に70歳代に多く見られた。（図－5）



図－5 大事にしているもの（技術・体力）

6) 「活動で大事にしているもの（精神面・社会性）」（複数回答）

特に多かったのは⑩「健康」（133/720）次いで、⑨「親睦・交友」（128/720）、⑥「チームワーク」（123/720）、⑧コミュニケーション（109/720）だった。更に、年代別で見ると、健康を意識しているのが50歳代から60歳代であり、50歳代から80歳代は、親睦と交友を大事にしており、チームワークを大切に活動に参加している事が伺えた。コミュニケーションは、ばらつきはあるものの80歳代を除いて平均的な意識が見られた。（図－6）

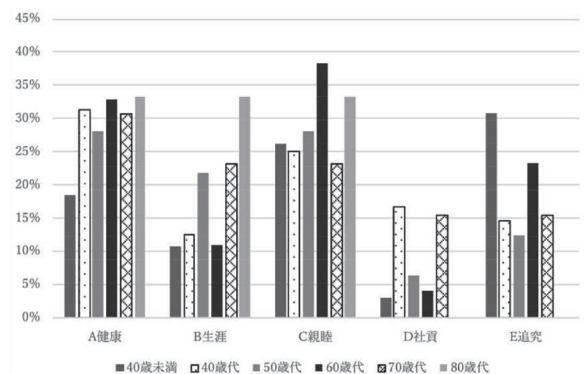


図－6 大事にしているもの（精神面・社会性）

7) 「活動の意義」（自由記述）

ここでの回答を整理した結果、A健康、B生涯スポーツ、C親睦・友好、D社会貢献、

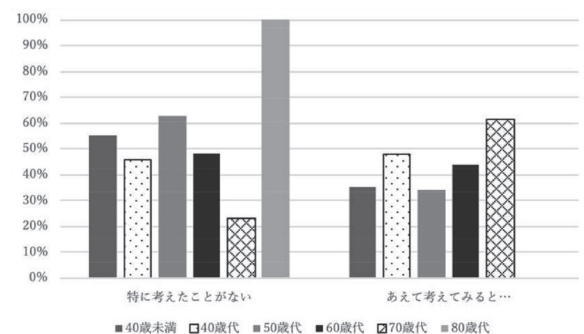
E追究の5つのカテゴリーに分ける事が出来た。その結果、特に多かったものはC「親睦・友好」だった。次いで、A「健康」、B「追究」が挙げられた。年代別で見ると、60歳代や80歳代が親睦・友好を期待している点が見られ、40歳未満を除く各年齢層にかけて「健康第1」を謳っている傾向が伺えた。40歳未満の年齢層では「追究」で多い割合を示しており、ユース（現役）時代にみる「向上心」の意識が残っていると考えられた。（図－7）



図－7 活動の意義

8) 「活動の今後の（方向性・将来性）について」

ここでは、②「あえて考えてみると」（115/234）が約半数の回答を得た中で、年齢別では特に70歳代の回答が多い傾向を示しており、「シニアバスケット」における将来性に対するアイデアなどの意識を持っている事が伺えた。一方で①「特に考えたことがない」の回答も約半数（119/234）であった。年齢別で見ると40歳未満と50歳代、80歳代が多い傾向を示しており、特にシニア活動の将来に対する具体的な考えが示されなかった。（図－8）



図－8 活動の将来性の考えの有無

9) 前の8)「あえて考えてみると」の回答を受けて(自由記述)

ここでは、回答の自由の内容を吟味し整理すると A健康・体力, Bヘルスケア・地域活性化, Cシニア普及発展・伝承, D余暇・趣味・生き甲斐, Eその他の5つのグループに分けることが出来た。そこで、特に多かったのが, B「シニアスポーツの普及発展・伝承」で、次いで, C「ヘルスケアによる地域活性化」, A「健康・体力」とD「余暇・趣味・生き甲斐」の順であった。「シニア活動の普及発展・伝承」では年齢層が40歳未満から70歳代にかけて高くなるにつれて具体的な考えが増える傾向が見られ、活動自体のキャリアと各々ライフステージにおける役割が影響していると思われた。また、60歳代と50歳代では他の年代に比べ、ヘルスケアによる地域の活性化を期待している傾向も見られた。尚、他の分類項目の回答についてはあまり年代間に特徴は見られなかった。(図-9)

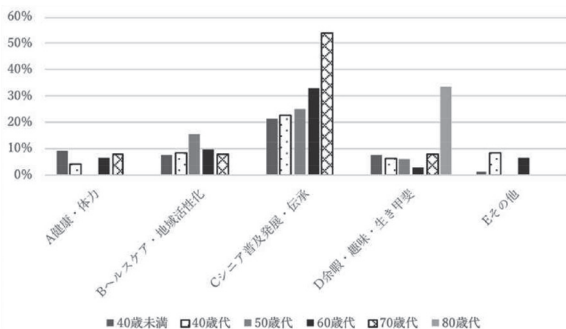


図-9 活動の今後の(方向性・将来性)

2. 聞き取り調査の結果について

A東北ブロック参加者、B横浜カップ参加者、C全国ゴールデンシニア交歓会参加者、D第2回全国社会人オーバー40・50バスケットボール選手権参加者毎に、「活動の状況と課題」をテーマに聞き取り結果を整理した。表-2に示す。

表-2 聞き取り調査(代表例)

分類	各調査現場 活動現場とその課題について
A	アンケート調査依頼者(東北地区)
	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム登録はするものの、公式の大会等、競技を楽しむ場や機会が少ない。 ・大会毎の規定・資格があり、自由に大会やチームメンバーの構成がしにくい。 ・チーム事情(職場・家庭環境など)によってメンバーが揃えられず断念する場合がある ・競技団体の規約の改変などで、登録制度に疑問がある、特に未成年競技者(中学生&ユース)の扱いについて ・登録料と還元する費用とギャップありトップ競技の分野に費用が偏っている ・協会の新体制・登録制度など(ガバナンス)に対して縛りが多い。
B	交歓大会の現場(1)
	<ul style="list-style-type: none"> ・今後大会の知名度が高まる事で参加希望チームの増加が懸念される。特に大都市型であれば会場等の施設の確保や審判・協会補助などの役員派遣などが課題 ・協力体制など、スポーツ環境に対して疑問視する面あり、結局グループ独自で工夫をし、各グループの趣旨(運営規則・方法)で進められているのが現状 ・シニア世代の為の各地域(ブロック)で気軽に開催・参加可能なイベントを年々2回程度出来る時代が来てほしい
C	交歓大会の現場(2)
	<ul style="list-style-type: none"> ・競技人口のすそ野を広げようとする目標を掲げるも実際の運営方法などは矛盾?登録料と還元費用とに差がありトップ競技の分野に費用が偏っていないか ・チーム内の活動(練習・懇親会他)に関してはあまり気にならない関係が、大会(試合)となると、勝敗にこだわるタイプと、楽しむ(レクリエーション)タイプに分かれてしまい、やりにくい場面も起こりうる ・参加競技者の立場を考えた、スポーツ環境の真のバリアフリー化が急務
D	シニア大会の現場(3)
	<ul style="list-style-type: none"> ・将来の事を見据え、高齢層カテゴリーの設置を急ぐ必要がある ・シニアの特徴を生かすとしたら、トップの大会は別にあまり縛りのない自由で縛りのない大会を多く開いても良いのでは(年間スケジュールが許せば) ・社会人連盟のカテゴリーの構想は良いが、実際の運営は、トップ思考の色が強い ・社会人カテゴリーに「オープン」・「オーバーエイジ」・「エンジョイ」等と名称が多く登録と参加資格等が分かりにくい(競技運営側の主旨が掴めない)

まとめると以下の6つになった。①まだ競技を楽しむ機会が少ない、②シニアの大会の参加年齢層の幅が広いためにチーム結成、大会出場においてメンバー構成が難しい、チーム作りが難しい、③社会の高齢化にともないシニアバスケット人口が増加傾向にあると感じる反面、組織や制度が未整備である、④大会が増えればそれに伴い会場や審判、運営費用などヒト、モノ、カネに関連する課題がある、⑤シニアバスケットボール愛好者の参加目的が競技成績志向型から健康や交流志向型など幅が広く、練習、試合等で活動が難しくなることがある、⑥年齢、クラスがまだ未整備、統一されず選手登録や参加資格について混乱する。

IV 考察

1. 活動を始めた動機では、親しい友人や仲間が活動動機となった40歳以下は、いわゆる現役世代であることから、学校や会社などの身近な関係、チームメイトなどの人間関係が要因として考えられた。60歳代の場合も同様にこれまでの人生で得た繋がり、友人関係などの要因が考えられた。一方、70歳代と80歳以

- 上では①「自主的」の動機が多かった。これは高齢期における健康不安やさみしさ、孤独からの回避、過去の栄光・ノスタルジーへの「すがり」等、高齢者にみる特徴が反映されていると考えられた。
2. 活動の目的の結果では、長ヶ原²⁷⁾の報告でも同じ指摘をしており、参加者の健康と体力に対する高い意識が確認できた。全体の傾向としては競技に対する拘りや、楽しみ方(趣味・生き甲斐・喜び)に没頭する場であると言え、スポーツ活動を通した「喜び」、「楽しみ方」を獲得しようとする欲求の一つと言える。
3. 現在の活動に対して満足しているかでは、ほとんど全ての年代で満足していることが分かった。満足していない理由としては、「シニアバスケット競技」自体のヒト・モノ・カネ等の環境要因が考えられたが、各年代層の選手個人レベルの健康や、競技スキル等の活動目的・欲求においては、一定程度の満足が得られている事が満足度の高さに反映されていると思われた。
4. 地域・関係団体の協力(理解)では、全回答の50%が「理解されている」と答えていた。他の3回答の解釈の仕方に拘ると、少なからず「完全には理解されていない」とも取られ、③「理解されていない」の結果と同意と捉えれば、3回答の数を合計する事が出来る。しかも、④「自由な形で活動しているため、協力関係がない」の回答は、理解・協力に関しては少なくとも肯定的ではなく、もともと無関係とし、「地域・競技団体」の組織・運営等の現状に対する配慮も考えられ、予め、公的な協力を期待せずに、現在の運営上の便宜を優先し活動する選択、「気兼ねなく、気楽に！」が実際の賢明な姿(独立性)が伺えた。
5. 活動で大事にしているもの(技術・体力)では、技術・体力の向上が活動目標の柱となっている事が言え、いわゆる「自己のヘルスケアを意識しながら競技活動の楽しみ方の獲得：喜び」の意識が伺えた。この結果は先の設問2)「活動の目的」の結果で示された「専門競技に打ち込める喜び」^{3), 4), 5), 31), 35)}

を通した健康志向というシニア世代のスポーツの取り組み方が表れている結果と言える。

6. 活動で大事にしているもの(精神的・社会性)で、「チームワーク」と「コミュニケーション」の言葉は「コミュニケーションはチームワークを得るための一手段」という説明されるように互いに関係する言葉と言える。「チームワーク」は、周知のようにバスケットボールのみならず競技スポーツにおける必須条件であり、代名詞として使われて来た経緯もあり、特にオフェンスプレーの成否を左右する意味でも、古くから競技をするプレーヤーにとって、一つの「合言葉」にもなっている。一方の「コミュニケーション」は、近年スポーツの科学的進歩に伴って耳にする機会が多くなったスキル用語の一つとして一般的になってきた経緯の中で、80歳代の現役時代を遡った当時のスポーツ環境を考慮すると、一応理解できる結果と言えるかも知れない。通常「チームワークを高める為には、先ずコミュニケーションを取る事が前提」と言う考え方が定着しつつある今日、コミュニケーションはオフェンス時のチームプレーはもとより、ディフェンス時も含めた戦術ツールとして必要不可欠とし、競技の上で両者共に重要な言葉であるという認識で参加している。そして、80歳代の思惑としては、チームワークそのものが全て(あ・うんの呼吸の解決方法)という捉え方もでき、「チームワークを得るために、あえてコミュニケーションは取るに及ばず」という経験論的表現「ベテラン」が表れている点も指摘された。以上の解釈を補足する意味において、Ⅲ結果1の5)で、①「シュート技術」でプレーを楽しむという結果等も加味すれば、80歳代は、あくまでもオフェンスプレー(シュートを決めたい)に魅力があり、とりわけ勝敗に拘りつつもシュートの出来栄えに対する執着心が強く表れているように思われる。また、40歳代と40歳以下では、むしろ現役(ユース)時代で活躍して来た実力を試したいというフレッシュマンによく見る前向きな気持ちに反し、活動経験の浅い年齢というグループ内の立場・関係(先輩・後輩)

等を受け止めつつ、とりわけ目標達成とチーム貢献の2面における複雑な思惑を抱き活動している状況が推察された。上記の結果を踏まえながら活動目的に結び付く具体的要因を考えた時、高齢者になるにつれ率直に「シュートを打つ喜び」を浮き彫りにしており、いわゆる競技特性の持つ本質を表しており、チームプレー、ディフェンス、戦術等、勝利を目指すための活動をしていた現役時代とは異なった取り組みが伺える。競技活動に向き合う姿として、スポーツ本来の喜び、楽しみ方を改めて考えさせられた結果となった。

全体的には、プレー中の矛盾を感じながらも、良き人間関係を求めつつ健康志向を持って活動していると判断できる。ともすると、「良き人間関係作り」が根幹にある事によって彼らの「真の健康の獲得」^{22), 26)}を目指している姿とも言ってよいであろう。

7. 活動の意義である、いわゆるモットーにしている事では、前の設問の結果と重なり、お互いの親睦を深め健康維持を図りながらスポーツ活動に参加している点が強調された。藺田ら²¹⁾は、熟年者の運動の楽しみ方は健康増進型「ヘルススポーツ志向」、余暇充実型「レジャースポーツ志向」、さらには、目標挑戦型である「マスターズスポーツ志向」の3志向に分類している。また、長ヶ原²⁶⁾はスポーツが多様多様であると同時に、個人の参加動機も多面的な為（中略）、今後、高齢者のスポーツは加齢に伴って高まる「健康」だけに偏重する事なく、高齢（シニア）だからこそ出来る成熟度を求める、マスターズ文化とレジャー文化にも目を向ける必要性を指摘している。

このように今回の結果は、競技者の目標は年齢こそ違いはあるものの、幼少の時から夢を追いかけて来たユース世代から、新たにスポーツを通し目標設定しようとする、いわゆるシニア世代における新たな生き方が示されていると言えるだろう。往々にしてスポーツの魅力・価値は、「勝利を目指し競技力を高める事にある」という点に目を向けられがちだが、今や医科学研究の発展に伴い、健康の

維持・向上に活用され各身体機能の発達を促す中で、特にコミュニケーションの場として他者との交流の機会を増やし、社会参加の促進と帰属意識を高めている点も見逃せない。

8. 活動の今後の（方向性・将来性）（自由回答）で、特に注目したのは、「シニアの普及発展と伝承」の結果で、70歳代から若い層にかけて、シニア活動の将来性に対する抱負と言うべきスポーツライフの成熟化^{24), 26), 27)}と捉えることができ、スポーツスペシャリゼーション²⁷⁾の意識を表す結果と言える。マスターズスポーツの動向に見るようなシニア世代のスポーツ活動に寄せる競技者の熱い思いが伺われた。他の回答においては特に多い回答数ではなかったものの、限られた意味ある結果としてまとめた。Aの「健康」とBの「ヘルスケア」は同じ健康志向と捉えられるが、Aは自己自身の健康と体力維持・増進という個人的な健康志向と言え、Bの方はヘルスケアによる地域活性化の狙いとする社会貢献的志向の2分化した点が指摘された。従って、ここでは先の研究報告に倣いながら次のような4類型のスポーツ志向に分けられ、その傾向が示された。

1. 「シニアスポーツの普及発展・伝承」
（マスターズスポーツ型）
2. 「ヘルスケア・地域活性化・貢献」
（ヘルススポーツ貢献型）
3. 「健康・体力」
（ヘルススポーツ体力維持型）
4. 「余暇・生き甲斐・趣味」
（レジャースポーツ型）

以上の4つの志向に分けられた自由回答の代表例を表-3に示した。

表-3 シニアの将来性の自由回答

分類	自由回答（代表例）
A	健康・体力
	・寝たきり老人にならないように頑張る（周囲に迷惑をかけない）
	・健康維持と社会的な交流を楽しむ場
	・健康維持と長寿をテーマに進む
	・仲間との交流がエネルギーを貰う健康の源である
	・健康第1しかしバスケットボールも第1？
B	ヘルスケア・地域活性化
	・高齢者による健康社会作り
	・高齢化社会に対応した地域のヘルスケアの寄与
	・国と地方自治体の連携で普及活動からスポーツ健康社会作り
	・シニア&マスターズ活動の普及で町の健康維持・増進＝町おこし
	・自分が元気・健康になる事で高齢化社会への見本にする
C	シニア普及発展・伝承
	・自己の成長・追究・限界に挑戦（年寄りのバスケ？を紹介）
	・将来の生涯スポーツの発展の為 次世代への伝承活動
	・トップ・強化・中央に偏らず、シニア・地方のスポーツ活動の理解と支援のあるスポーツ社会を（ユニバーサルデザイン）
	・生涯スポーツの魅力を後輩に伝える仕事と捉えている
	・シニアとジュニアとの交流活動（指導・教育）の場でありたい
	・国・協会支援で全国規模の普及活動を行いたい
D	余暇・趣味・生き甲斐
	・バスケットボールそのものが「生き甲斐」
	・体が動く限り趣味の延長として楽しむ
	・人生を謳歌する活動から仲間と喜びの共有を得る事
	・無理せず楽しくあれば満足のみ（交流会の参加）
	・人生の楽しみ方を語り合う場として意味がある
	・続く限り体に鞭打って？無理せず燃える活動
	・シニアバスケはスポーツ版の天職
E	その他
	・シニア用の新しい規約・ルール等があっても良い
	・旅・観光そして仲間とのレセプションを楽しむ
	・女性スポーツの普及も将来的に考えなければならない（育児等）
	・若者には負けないシニアのプライドを示す場

V おわりに

全体の参加傾向を見ると、個々人が自己の趣味・特技を活かし仲間づくりをしながら健康志向を持って活動していることが伺われた。現実には体力の減退を認めながらも、活動自体をトレーニングの一貫としてプレーを楽しむという、しっかりした目標も持って臨んでいる。とりわけ、活動の目的や意義では、各年齢層の間に違いが見られたが、年齢が高くなるにしたがって、スポーツ活動そのものに対する「成熟化」^{21), 23), 26), 27)}なるものがみられ、教育、文化の伝承活動にみる社会貢献とも言える第2の人生(Second Life for Sports)、いわゆる、それぞれの生活環境に上手に対応しながら「自己実現」を目指そうとする意識が伺われた。

活動自体に対する地域・関係団体との協力関係（理解）において、アンケート結果と聞き取り調査の回答の間にギャップがみられた点では、実施方法や回答方法等の違いが原因として挙げられた。実際の活動では理想と現実の矛盾を受け止めながら、上手に対応しているのが現況であった。また、調査対象者には80歳に及ぶ後

期高齢者が含まれ、若干名ではあったが、この年代の参加動機・目標などシニアスポーツに対する特徴ある堅実な思考・意識を確認する事ができた。

本研究の結果では、過去の研究^{20), 21), 25), 27)}等で示されているアクティブエイジングの3分類（志向）に対し、ヘルススポーツ志向については、自己のヘルスケア型と社会貢献として捉えているヘルスケア型の2つに分けられ、各年代に違いが見られた。

今回の僅か3名ではあるが80歳代の資料・データは、統計的な判断材料としては評価し難いが、ある見方をすれば今後のシニアスポーツのための大切な資料・データの一つになると思われたので、その特徴についても検討を行った。

1. 活動では、あまり周囲に「捉われず」自己の生き方を大切にしながら活動そのものに一途に取り組んでおり、プレー中は限られた時間で気に入った仲間とただひたすらに、勝負を賭けた試合で得られる共感を求め「バスケットボール」そのものに没れる時間を大切にしていることが伺えた。

Ex. 「ノスタルジー」&「フロー理論」

2. 集団スポーツ競技においてはチームワークと謳いつつも、80歳代を含む高齢者層（70歳以上）も他の年代同様にシュート技術の向上や習得について、このスポーツに関わるときに大事にしている要因の一つに挙げている。この事は、集団スポーツ競技が勝利を目指す為の大前提（パラダイム）の一つに「チームワーク」があるものの、それに加えて、老いてもなおバスケットボール競技の醍醐味であるシュート技術への飽くなく追求が年齢に関係なくあると思えた。人生の営みの中で価値観の変化が伺えると同時に、スポーツ本来の「喜び」を獲得しようとするとき、その競技の普遍的なもの、変わらないものがあることも伺えた。

近年のアクティブエイジングの可能性については、先行研究^{23), 24), 26)}でも示されているように、高齢者（マスターズ・シニア…）という、単に「衰えた人々」として捉えるのではなく、「ジェロントロジー」の学問的追究を図ると同時に継

続的な研究推進を行う事を前提に、各カテゴリーの整理を行いながら高齢者の存在や役割についての志向・価値観などの活用性を考え、参加者自身の意向を尊重した取り組みが必要と考えられる。いずれにしても、現在注目されているマスターズスポーツをはじめ、シニアスポーツ活動（成人含）における中高齢者のスポーツ活動、いわゆる生涯（生甲斐）スポーツ²⁵⁾ (Sports for Life) : (アクティブエイジング) の意義・役割・効果は計り知れないという事実は誰もが認めている。

今後、我が国の超高齢化社会に向けたさまざまな政策と取り組みの中で、私達は今までに経験し得ない未知の社会について謙虚に取り組む必要があろう。単に形式的な整備に拘らず、真の社会的発展はいかなるものかを著者らは模索検討している。

結局の所、スポーツ活動の意義や内容、その方向性とあり方等についての答えは、活動者自身が持っており、ことある毎に「現場の声」に耳を傾けると共に専門分野に留まらず、彼らを取り巻く全ての活動現場に向けた臨床的研究の構築を通してシニア社会のより良い環境作りを目指した具体対策（ユニバーサルデザイン）を打ち出す事が急務と考える。

今回、単にバスケットボールでの一競技の調査報告ではあったが、少なくともシニアスポーツ活動が生涯スポーツの広い枠組みの中で、お互いの垣根を払った思考の基、「自由」、「気軽さ」、そして「達成感」のある「人生の生き甲斐を獲得する場」である事を確認する事が出来、更に、スポーツのセカンドライフとするシニアバスケットボール愛好者の持つ価値観や、活動に対し「自己実現」に向けた前向きな姿勢を確認する事が出来た。

【謝辞】

本研究にあたっては、全国シニアバスケットボール大会の先駆けとなった山形県八幡シニアバスケットボールチーム代表の羽根田 篤氏、阿部成彰氏には研究と調査の両面において後押しをして頂き、また、調査実施では対象となっ

た競技者の方々をはじめ、青森県バスケットボール協会の佐藤芳正氏、能代市バスケットボール協会長の七尾明英氏、湯沢市の畑澤三幸氏、岩手マスターズの丸山春久氏、福島県バスケットボール協会長の鈴木政雄氏に協力頂いた事、そして、全国シニアバスケットボール交歓大会においては横浜大会主催事務局の石田秀敏氏、川戸政角氏、鈴木 満氏、ゴールデンシニア大会では東松山市バスケットボール協会長の鷺沢秀夫氏、日本学連名誉会長である山口 忠芳氏、第2回全国社会人O40、O50 バスケットボール大会では宮城県バスケットボール協会の阿部優也氏にご協力頂いた事、更に、バスケットボール歴史研究の第一人者である水谷 豊先生には、シニア・マスターズスポーツに関する貴重な資料提供と助言を頂いた事など、多くの方々にご協力頂いた事に対し心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

1. D.S.Eitzen,etc. (1997) Sociology of North American Sport, Brown & Benchmark Publisher, p.308.
2. International Masters Games Association「World Masters Games 2021」<https://imga.ch/event/world-masters-games-2021-kansai/>
3. Mihaly Csikszentmihalyi 著, 今村浩明 訳 (1996) 「フロー体験：喜びの現象学」世界思想社
4. Mihaly Csikszentmihalyi 著, 今村浩明 訳 (2001) 「楽しみの社会学」新思泉社
5. Susan A. Jackson, Mihaly Csikszentmihalyi 著, 今村浩明, 川端雅人, 張本文昭訳 (2005) 「スポーツを楽しむ：フロー理論からのアプローチ」世界思想社
6. 青柳幸利 (2015) 「一日一万歩はやめなさい！」廣済堂出版 P.175
7. 秋山弘子 (2012) 高齢社会を支える学際科学「ジェロントロジー」総括プロジェクト機構 ジェロントロジー 寄付研究部門 講義資料 <http://gerontology.jp>
8. 石山育郎 (1992) 「中高年齢者のスポーツ活動と生きがい感」体力科学, Vol.41, (3), P.414
9. 一般社団法人社会人バスケットボール連盟 (2019) 「第18回全国ゴールデンシニア大会 大会要項」日本バスケットボール協会 <https://jsb-basketball.or.jp/>

10. 河合雅司 (2017)「未来の年表 - 人口減少でこれから起きること -」講談社 PP.25-26
11. 君原健二 (1900)「人生の走り方」—あなたにも自分に合った生き方のストライドがある— 勁文社
12. 日下裕弘・丸山富雄 (1985) 一般成人のスポーツ観に関する研究」体育・スポーツ学研究, 7, PP.131-158
13. 邱 永漢 (2002)「年の取り方 考えてますか」グラフ社 P.8
14. (公財) 日本バスケットボール協会 (2016)「社会人バスケットボール連盟について」日本バスケットボール協会 連盟規約 PP.1-20
15. (公財) 日本バスケットボール協会 (2019)「1918年度チーム加盟数一覧表」日本バスケットボール協会 <http://www.japanbasketball.jp/jba/data/enrollment/>
16. (公財) ワールドマスターズゲーム関西組織委員会 (2020)「World Masters Game 2021 関西シンポジウム大会プログラム」PP.3-6
17. 厚生労働省 (2018)「健康日本 21 (第2次) の推進に関する資料」https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkoukenkounippon21.html PP.147-151
18. SSF 笹川スポーツ財団 (2010)「諸外国から学ぶスポーツ基本法」日本が目指すスポーツ政策
19. SSF 笹川スポーツ財団 (2018) スポーツ白書 2018 .
20. 財団法人健康・体力づくり事業財団 (2010)「2009 アクティブエイジング全国調査 概要版」PP.6-9
21. 藺田大地 他 (2017)「中高齢者におけるマスターズスポーツ志向の予測要因に関する研究」生涯スポーツ学研究, VOL.14, No.1 : PP.13-23
22. 菅原一昭 (2018)「東北マスターズ陸上選手権大会参加者の競技意識に関する研究」—参加者の価値意識に着目して— 仙台大学大学院スポーツ研究科修士論 Vol.19 : P.122
23. 谷藤 千春 (2012)「マスターズスポーツの現状と課題」千葉大学教育学部研究紀要 Vol.60, PP.365-371
24. 谷 めぐみ・長ヶ原 誠 (2006) マスターズスポーツの動向 (特集スポーツ運動の実施動態) 体育の科学, Vol.56 (5) PP.354-360
25. 長ヶ原 誠 (2003)「中高齢者の身体活動参加の研究動向」体育学研究, Vol.48 (3) PP.245-268
26. 長ヶ原 誠, 他 (2007)「ジェロントロジースポーツ —成熟人生を”好く”生きる人のためのスポーツライフ—」ジェロントロジースポーツ研究所, PP.18-36
27. 長ヶ原 誠 (2009)「人生と社会を活性化するアクティブエイジングの可能性 —中高齢者の運動・スポーツに関する全国調査結果から—」第6回運動・スポーツ分科会 講演要旨, PP.4-12
28. 内閣府 (2019)「スポーツの実施状況等に関する世論調査」PP.6-58, P.71-78
29. 永田晴章・他 (1998)「スポーツ集団のマネジメント」ぎょうせい, PP.26-49
30. 西坂珠美・會田 宏 (2003) 社会人バスケットボールチームにおけるチームサティスファクションの構成要因 武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学), 53, PP.43-50
31. バスケットボールプラザ (1917)「JBA 社会人連盟発足」NPO 法人バスケットボール振興 P.40 http://jbbs.jp/wp/wp-content/uploads/2017/12/Basketball_Plaza_No76.
32. 彦次 佳・長ヶ原 誠 (2008)「成人期以降における運動・スポーツの開始と頻度増加の実現要因に関する縦断的研究」体育・スポーツ科学, 17, PP.9-15
33. 松波 勝・高橋伍朗・野村武男 (1992)「マスターズ・スイマーの競技大会に対する意識について —1991年第4回パシフィック・マスターズ水泳選手権大会において—」日本体育学会 第43回大会号 B, P.788
34. 三浦雄一郎 (1900)「人生はいつも「今から」」KK ロングセラーズ, PP.16-17
35. 宮内 孝知 (1998)「中・高齢者スポーツの現状と課題」日本学術会議公開シンポジウム, 日本体育学会 第49回大会, P.63
36. 山口泰雄 (2002)「高齢者スポーツの現状と課題 —アクティブシニアのすすめ—」体育の科学 Vol.52, P.759-762
37. 山口泰雄 (2007)「健康・スポーツへの招待 —今日から始めるアクティブ・ライフ—」体育施設出版, PP.80-92

(2020年 5月31日受付)
(2020年 7月 7日受理)